

春燈

昭和二十七年七月一日発行 毎月二回発行 第五十九号 第十号

昭和二十七年十月一日発行 毎月二回発行 第五十九号 第十号

10月号

PDF制作 俳誌のsalon

敦の句

自愛せり梅雨の毛布を掛け足して

句集『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

東京句会でこの句がまわってきたとき何かとても気になつていただいた。後で作者が敦先生とわかつたとき、小さなざわめきが起つたのを今でも覚えている。この年、敦先生は俳人協会の理事長として俳句文学館建設資金の募金などで、いつもに増してご心労のことが多かった。梅雨寒の深夜。上五に置かれた自愛せりの強いひとことが大変であつたお立場を感じさせ胸が痛い。

井上春子

敦の句

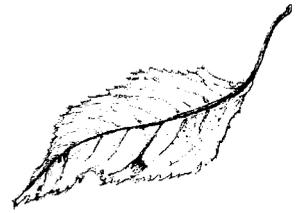
羽抜鶏邪慳にされる覚えなし

句集『柿の木坂雑唱以後』平成二年

夏になると鶏は、羽毛が抜け替わる。その時期に羽毛が脱落し鳥肌が露出する。鶏にとつては涼しいが、人様から見ると誠に貧相である。しかし鶏は、この間も卵を生み続け貢献しているのだから、邪慳にされる覚えはないと、開き直った貌をしている。こんな軽みの敦句が大好きで「覚えなし」の弱者味方の措辞が、敦先生の人柄を表している。また擬人化すると面白いものである。

鈴木鳳来

主宰の句



鈴木榮子

香水の髪結新三の邪魔をせり

蟬時雨鳴きたきときはわつと泣け

迎火焚きて昔の家族に戻りけり

送り火を消して跨ぎて盆了る

佳き椅子に伴侶のごとく凭りて秋



蛍

園
部
落
郷

家の裏は死者搬ぶ径蛍とぶ
蛍火は黄泉の提灯かも知れぬ
短命の蟬に病ひはなかるべし
使はねば錆びる鋏なり梅雨茸
鮎の血を吸ひゐて蛭の伸び縮み
鉢の金魚死んで大河に放たれし
夜水番また人魂をひとくさり
あらよつと掛声高く竿灯夫
竿灯を腰に乗せしがよろめきぬ
偷生の嘆とも残る蟬の声

夏芝居

中村嵐楓子

夏芝居南無と唱へて殺しけり
端敵はがたきのきびきび憎し夏芝居
出語りの老若二人にん玉の汗
水打つてゐる幕開きや若女形
夏羽織落して見染めきまりけり
苗売りを聞かせて一と間置きにけり
おそろしき薬煮てゐる暑さかな
夏のれん分けし手にはや大向う
涼しさは煙管突いたる型にこそ
人は死へまつしぐらなり夏芝居

蟬時雨

黒田美恵子

潮騒やチャペルへ急ぐ夏帽子
蜜豆の甘さひかへ目愛もまた
みんみんの切なきまでのラブコール
もう止めることの出来ない蟬時雨
白雨来て外人墓地を洗濯す
禱り篤き青春戻れ花氷
泣き言も一緒に啜る心太
百歳を生きる決意や百日紅
落蟬の軽さのやうな死を願ふ

当月集

鈴木 榮子選



○ 宮崎裕子

かはほりや荒川またぐ橋明り
鬼灯を鳴らせずしまひ餓鬼大将
星飛んで夢を明日につなぎけり
梓川五感に奔る水の秋
寝転ぶや穂高の迫る青芒

○ 菅沢陽子

登山靴主峰の砂利を噛み来たる
風涼しカウベル鳴らし二頭馬車
澄む湖に逆さマッターホルンかな
日盛りやアレッチ水河青白く
鈴の音や氷河湖出づる冷し牛

○ 吉田かずや

○ 太田佳代子
朝顔市この一鉢に決めにけり
走馬灯まはりはじめを見守りぬ
母親に呼ばるるまでの端居かな
二人もて始まる家庭夏料理
子のごとく抱く米袋夕焼道

○ 吉田かずや
黴の靴終身雇用の世は過ぎて
敗戦忌自動車免許取れず老ゆ
サングラスよりの視線に気付きけり
てんと虫ネイルアートに紛れけり
風鈴の下で爪切る風呂上り

春燈の句

鈴木 榮子選



殺象を見ずなりて村亡びけり

宮崎 宮地れい子

劣性遺伝証すメンデルの青ぶだう

十二使徒の一人はユダやシャワー全開

ピーターラビット絵本抜出す夏休

生き死にかかはりなくて水中花

海消して汐留サイトは立版古

涼新た眉の形の気に入らぬ

紙飛行機お花畑に不時着す

東京 田嶋 洋子

出て見よと妻がわれ呼ぶ盆の月

千葉 伊藤 賢三

保護色に憩ふ雷鳥親子かな

胡瓜の馬手綱をつけず鞍もなし

洒落れた街の洒落れたポストや青葉風

ここだけの話日傘の中で聞く

フルコースの人間ドック夏休

東京 馬場 宏一

何もせず何も思はず日の盛り

東京 佐渡谷秀一

大吟醸佳器の彩る夏料理

ゆふべより広めに水を打ちにけり

真穴子や瀬戸内よりも羽田沖

東京 馬場 宏一

志ん朝のテープ終りし宵風鈴

養殖の土用鰻に旬のなし

三伏や顔の険しき文官備

炎昼や予約の取れぬ料理店

兵庫 川端 正紀

晩夏光甕棺うちに残る朱ヶ

東京 小泉 三枝

空蟬のほほゑみの相蔵しけり

葉草園の薄荷をちぎり暑を弾く

戦火を浄めて燃ゆる大夕焼

余言

鈴木 榮子

走馬灯まはりはじめを見守りぬ

太田佳代子

走馬灯はこの頃あまり見られなくなつた。縁日の隅の方で何台か並べて灯を点し売られていた。幻想的で何か心が柔らぎ、女の子には欲しいものだった。男は欲しくないのだろうか。いつまでも見とれ、去りかねていると、母親が「買うの」と聞く。そういうときの子供の嬉しさといつたら、たとえようもない。早速買って家に戻ると、期待感を胸いっぱい蠟燭に火をつけて、回りはじめを見守るのだ。

鬼灯を鳴らせずじまひ餓鬼大将

宮崎 裕子

酸漿は鮮明な紅色で、いかにも可愛らしく奇麗だ。中の肉

質を楊子などでとり出して口中で息を入れ且つそれを舌で押し鳴らし、得意になるのだ。要するに子供でも多少器用なら口中で息を入れ、それを口中で潰して音を出すことが出来る。上手な子、下手な子、そしてそれ事体全く嫌いな子もいる。鬼灯は子供によつてはむしろ面白いより、苦痛の種になる。なんでも仕切っている女の餓鬼大将が鳴らせないというところが愉快である。

一台は子供歌舞伎のまつりかな

室井津与志

作者は会津の方で、会津へは郡山から入るが会津若松から「会津田島」とか会津何々と私鉄を乗継いで東武浅草へ出ることが出来る。

途中に塔の崩の見える溪谷を電車で通るが、崩はオーバーハングのようなもので崖の下が大きく剝られている。この辺に出来立てのところ、ここまで海が侵蝕していたのかと思う。

その途中の会津田島は立派なお祭りの継承されているところで子供歌舞伎も盛大に行われているだろう。